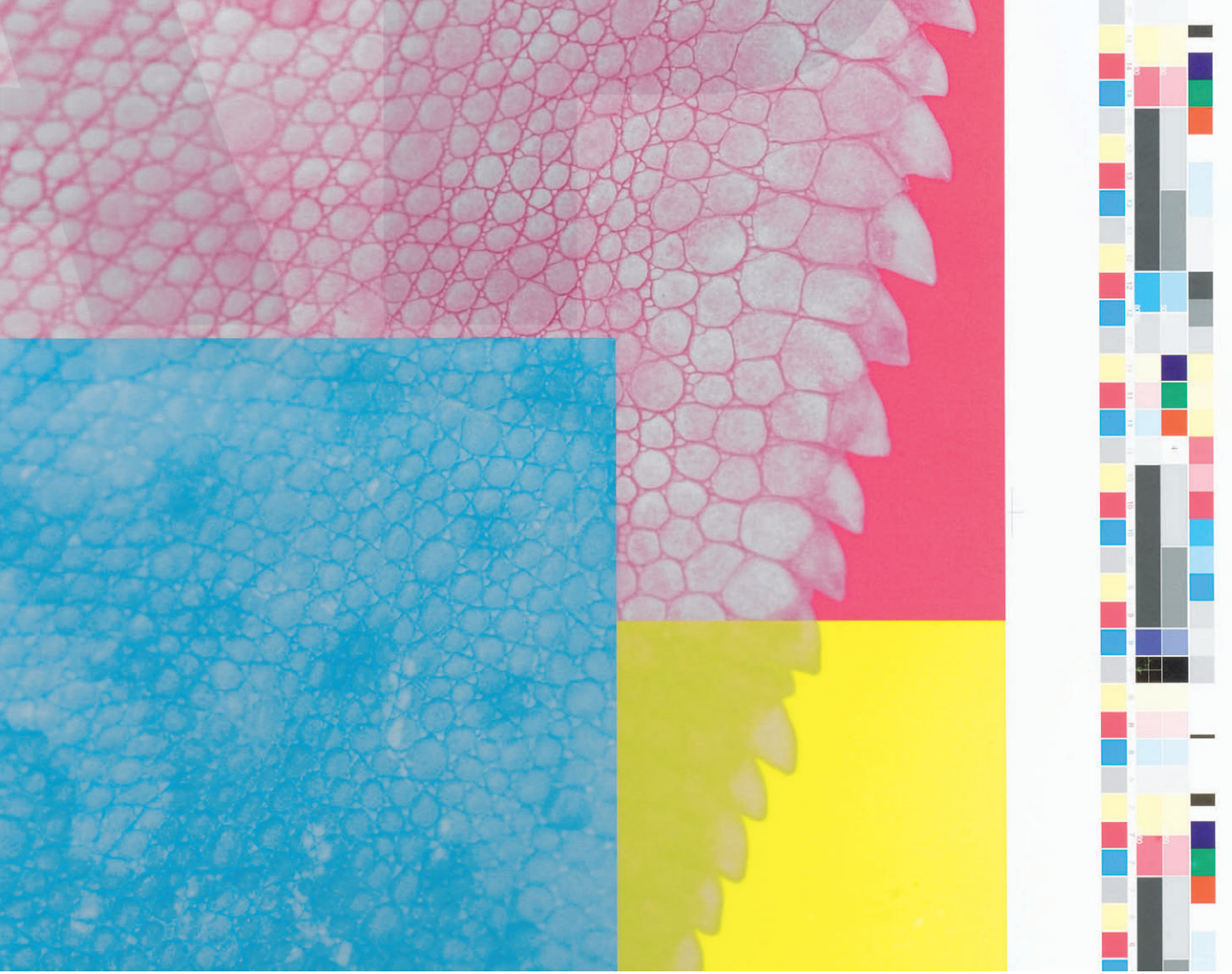


重ねてつくるイロ・カタチ

青柳雅博

CMYKの４色のインキで色を表現する印刷では、
４つの版をひとつずつ重ねるたびに、徐々に形や色が姿を現す。
このプロセスを分解し、グラフィックとして再構築することで、
版が複層していく印刷の工程がポスターのなかに凝縮される。

――作品コンセプトをお聞かせください。

オフセットのカラー印刷の工程を楽しく見せたいと考えました。普通の印刷物は、C（シアン）、M（マゼンタ）、Y（イエロー）、K（ブラック）の4つの版を重ね合わせて色と形が作られています。ところがモニタ上で作成した画像がそのままプリントアウトされることが当り前になっている僕達にとって、カラー印刷がCMYKの4色のインキで出来上がっているという実感があまりありません。雑誌やポスターを見ても、この4版の重なりを肉眼で判別できるわけでもないので、理屈としてわかっていても実感としては納得しにくいのです。そこで、この4色が重なり合って色と形ができあがっていくプロセスを視覚化した作品に仕上げることにしました。特別なことと言ったらK版をネガ反転した版を銀で刷ったことぐらいで、あとは普通のプロセス4色の製版です。この４版すべてをブラックのインキで刷ったモノクロの表現を出発点に、1色、2色、3色、4色と刷り重なっていって色と形ができあがっていく。そして最後は銀になって色彩を超えていくというストーリーです。簡単に言ってしまえば、印刷機の中で行われている工程を可視化したわけですね。

――最初から版がキーワードだったんですか？

デザイン的な面白さというより、版でインキを重ねて色と形をつくっていくという印刷の基本的な原理をテーマにしたグラフィックをつくりたいと考えていました。それで最初は普通のプロセス4色の分解版と普通のプロセスインキを使って、刷り回数だけを変えて面白い表現を見つけようとしたんです。実際にCMYKの各版を2度ずつ刷ったものなどは、ビックリするぐらい力強くて新鮮でした。でもグラフィックとしてはもう少しドキッとできるような表現を探したい。そこでK版を銀やシアンで刷ってみたり、間にニスをはさんでみたり試しているうちに、たまたま銀とシアンの2版だけ刷ったものを目にしたんです。それで、いっそのこと色や形を構成している版をバラバラにして構成してみたらどうだろうと思いついたのです。

――版を重ねていく発想から、版を分解するという発想に転換したんですね。

そうです。ただし、印刷の参考書に出てくるような分色版のサンプルみたいになってしまうと面白くないので、もうひと捻り加えたいなと。それで、K版をネガ反転して銀のインキで刷ることにしました。もともと色の3原色はシアン、マゼンタ、イエローの3色なので、スミのインキがなくても基本的な色調は再現できます。しかもK版をネガ反転すると、CMYの3色のインキが重なる部分の下に銀のインキが刷られるので、銀のインキの上にシアン、マゼンタ、イエローのインキが重なっていく面白さも生かせます。それから最後に、仕上げとしてタイポグラフィをニスで重ねました。ニスはもちろん無色透明ですが、ニスを重ねたところは質感や色みが変わって、＋αの表現になったように思います。

――今回の作品では徹底的に版にこだわりましたね。

僕が凸版印刷に入社した時はもうほとんどの工程がデジタルに移行していました。それに、学生の時からMacが制作ツールの基本でしたので、モニタ上の色がすべてで、インクジェットなどの出力が当り前、印刷するときはCMYKの４版に分解されるなんて全く考えたことがありませんでした。実際に仕事をするようになっても、それこそ僕達のような印刷会社のデザイナーでさえ、印刷物を分色版で見るチャンスなんてなかなかありません。ましてや一般の方ならなおさらです

よね。印刷のそういう隠れた部分を知ってもらうこともこの展覧会の大きな目的のひとつですし、それを作品の形で提示することが社員でもある僕の仕事だ、と。

――凸版印刷社員からの参加者ということで何かプレッシャーはありましたか？

僕の場合は他の方々と比べ、キャリアや実績は乏しいし、それに企業カレンダーの企画・制作活動が中心だったので、ビジュアルの訴求力とか構成力とか、そういう部分では勝負にならないと思っていました。ただ、印刷の現場に近いところに身を置いているというのが唯一の強みです。製版オペレーターの高浪さんや足立さん、コーディネーターの菊池さんとは同じビルにいますので、階段を上り下りするだけで相談に行けるし、貴重なアドバイスをくれる先輩もたくさんいます。それに周囲はさまざまな印刷物であふれていますので、参考資料にも困りません。モチーフにしたカメレオンも、当社のカメラマンの南雲さんに半日以上もかけてスタジオで撮影してもらいました。

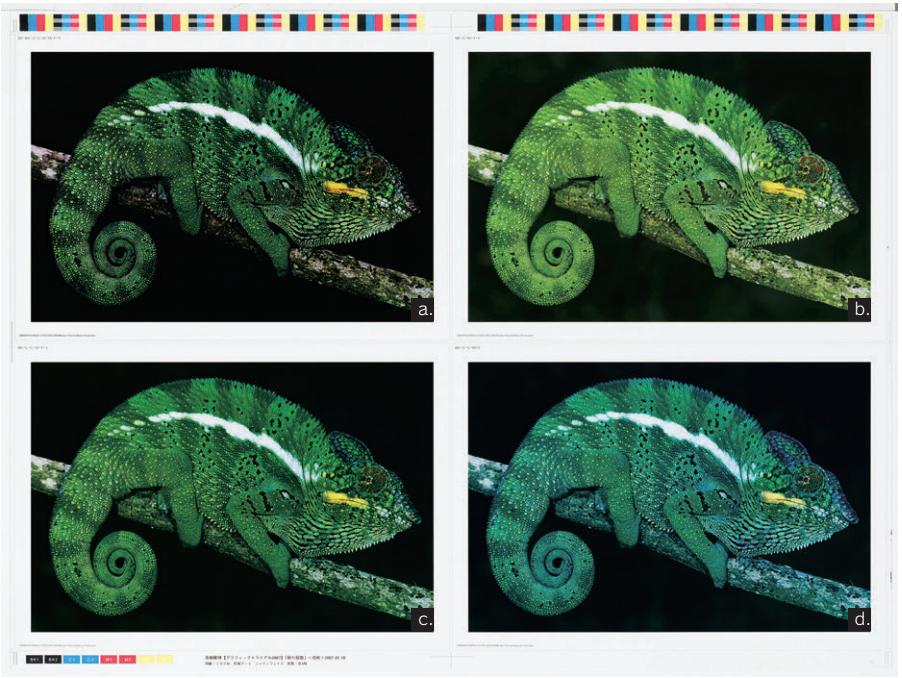
――ところで、カメレオンというモチーフはどこから？

カメレオンは擬態という特性があって、周囲の景色に応じて体の色を変えることができます。印刷物も版の作り方やインキや紙の選択によって、色調は変わるという意味を込めました。それに造形的にもとても興味深い形をしていますよね。まるで恐竜みたいでしょ。この不思議な雰囲気が大好きだというのが一番かな。

trial process

青柳雅博 トライアルプロセス

原稿　　©MARTIN HARVEY/FOTO NATURA/Minden Pictures/Nature Production



プロセス4色の版を重ねて色と階調の変化を確かめる

C版とY版を2度刷りしてその効果を見比べた。特別なことはせず通常のプロセス4色の製版。

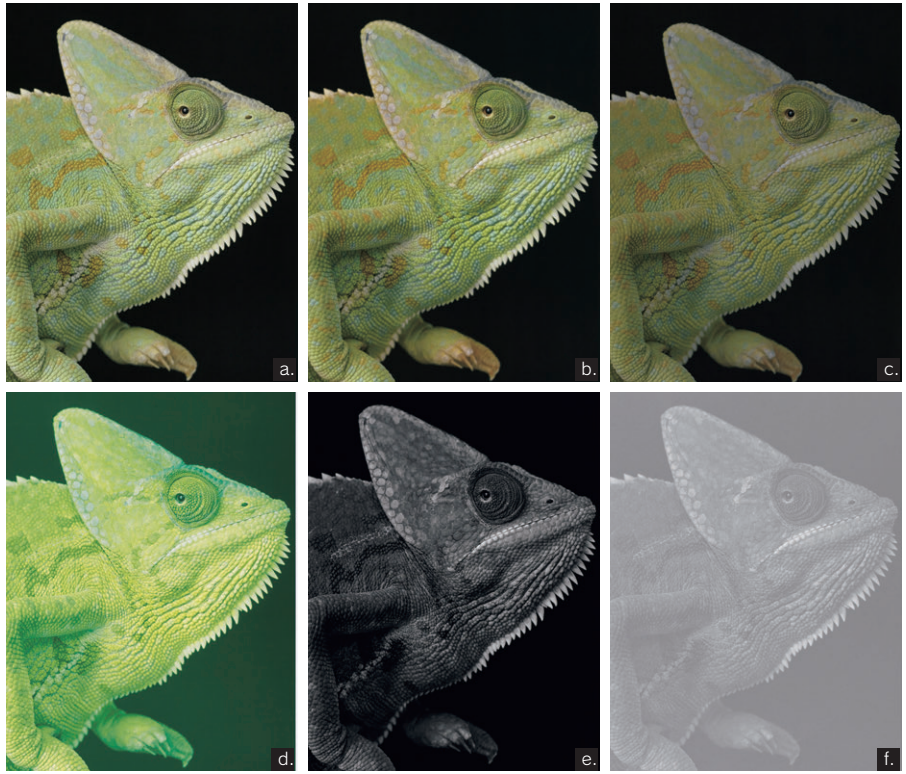
a. プロセス4色を各版2度刷り
b. プロセス4色のうちイエローを2度刷り
c. プロセス4色のうちシアンとイエローを2度刷り
d. プロセス4色のうちシアンを2度刷り

版とインキの組み合わせで面白い表現を探る

プロセス4色の版をさまざまなインキで刷ってみる。K版を銀のインキで刷ったり、CMYK全ての版をブラックで刷ったり、KとMの版をシアンで刷ったり、いくつもの実験を行った。

a. プロセス4色で印刷
b. K版を銀で印刷、シアン、マゼンタ、イエローを2度刷り
c. K版のネガを銀で印刷、シアン、マゼンタ、イエローを2度刷り
d. K、M版をシアンで印刷、イエローを2度、グロスニスをC版で2度刷り
e. K、C、M、Y版をスミで印刷
f. K、C、M、Y版を銀で印刷

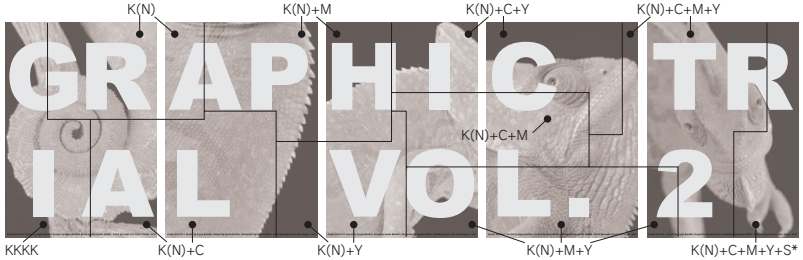
原稿



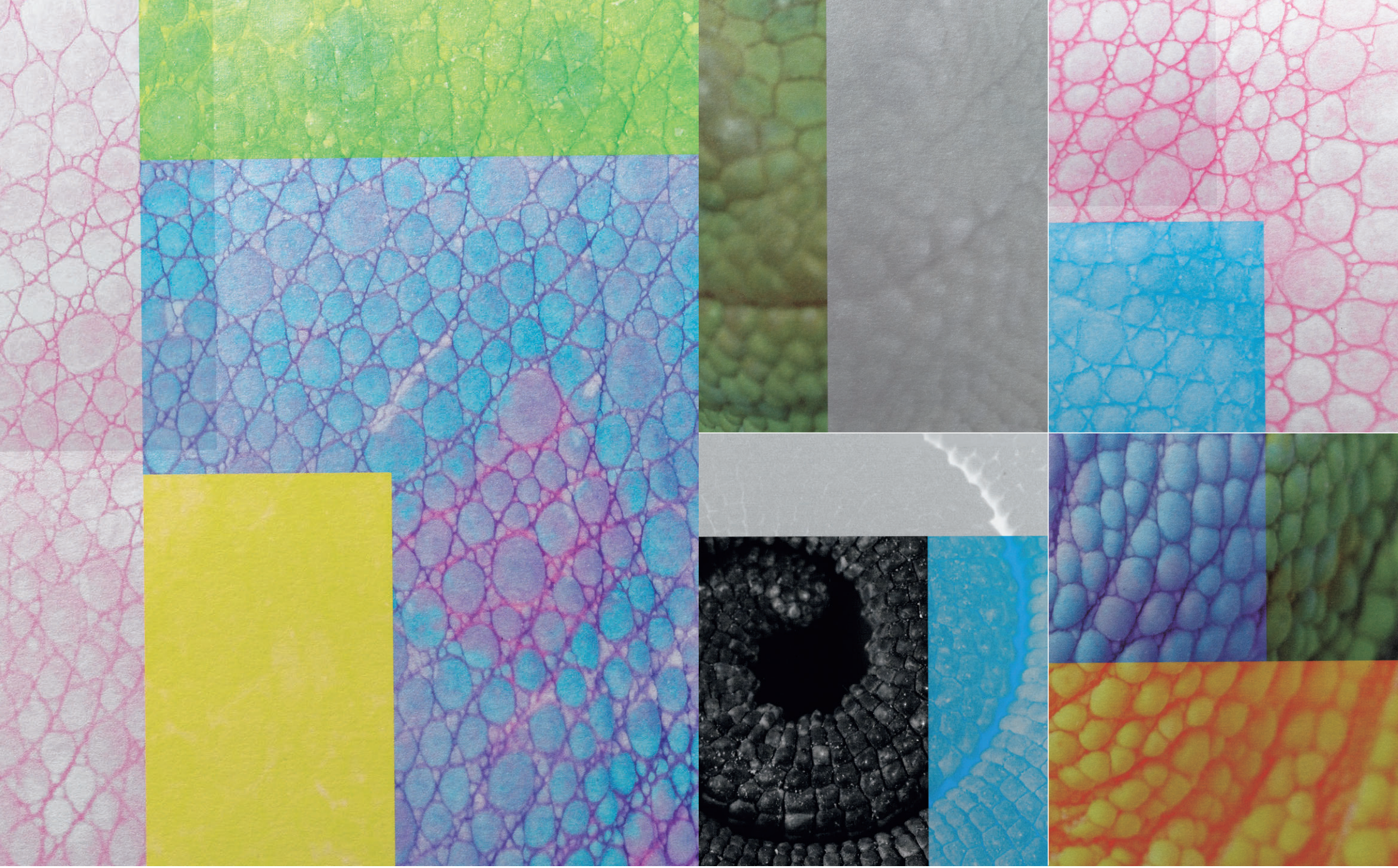
a. b. c. d. e.

用紙：エスプリコート SS 四六判 220kg (a.b.c.d.e. すべて)
a. 版の構成：ブラック(K版)→ブラック(C版)→ブラック(M版)→ブラック(Y版)→銀 (K版のネガ)→シアン→グロスニス→銀
b. 版の構成：銀 (K版のネガ)→シアン→マゼンタ→イエロー→グロスニス→銀
c. 版の構成：銀 (K版のネガ)→シアン→マゼンタ→イエロー→グロスニス→銀
d. 版の構成：銀 (K版のネガ)→シアン→マゼンタ→イエロー→グロスニス→銀
e. 版の構成：銀 (K版のネガ)→シアン→マゼンタ→イエロー→銀→グロスニス→銀
※展示作品は仕様が変わる場合があります

※K(N)=K版のネガ版を銀刷り　※文字部分はグロスニス（厚目）



※KKKKはKCMY版全てブラック　※文字部分（シアン）は銀ベタ　※S*=銀ベタ版80%濃度



design detail

c.	e.	b.
	a.	d.